

# 手と手をつないで

No.369

山口 裕之

(マザー・アース人権啓発研究所主宰)



## 戦争の実相を語り継ぎ、 世界平和を願う

### 祈りの夏

9月に入り、暑さは残りますが気候は秋に向かって移ろい始めています。この夏をどうすごされましたか？国内ではオリンピック・パラリンピックの報道が続きましたが、戦後76年目にあたる今年の夏も戦争の実相を伝え、平和について向き合う営みが各地で続けられました。今月のコラムでは私が出会った福岡市原爆被害者の会の山口美代子さんをご紹介します。

### 美代子さんの被爆体験、語れる人の現状

本年90歳を迎えられた美代子さんは高等女学校3年の時、長崎市の爆心地から約1.4キロの学徒動員先の工場で作業中に被爆されました。机の下に潜り込んで一命をとりとめたものの、一時は胸元に原爆症とみられる紫斑が出て体が弱り、生死をさまよいました。長い日々闘病をされたのち、一人で歩けるようになり12月に学校に行ってみると多くの級

友の姿がありませんでした。

それから76年たった今年も8月9日に高等女学校の慰霊祭に行かれましたが、公園の片隅にある慰霊碑に集まった級友はほんのわずかでした。原爆被害の体験を語れる人は近年高齢化のためますます少なくなっています。



### 平和パネルを制作

美代子さんは、自分自身もいつまで原爆被害の体験を語れるかわからないので、自分が体験したことを絵に残すことにしました。

美代子さんは数年前から長崎原爆の惨状を大判の画用紙に描き続け、23点になりました。大げがをした人が川に逃げ込む場面や、混乱の中で親族の遺体を探し回る人、亡くなっ

た父を国民学校の校庭で火葬するために運ぶ様子、原爆投下前の日常生活や青春のひとコマなどが短い言葉とともに克明に描写されています。

今年になって、美代子さんを応援する仲間が集ってこの作品をパネルに加工しました。春からこれまでにパネル展や平和コンサートとともに語る会、パネルを見せながらの学校での証言活動が開かれました。

美代子さんはこう語っておられます。「頭に刻み込まれた光景を形に残さなくては、という一心で描いた。」「コロナ禍の影響もあり証言を聞いていただく機会が減ったけれども絵を通じて後世につたえていきたい。」「凄惨な被爆体験をもつ美代子さんの語りからは「生き残った者の使命」や核兵器廃絶への強い意志、平和への祈りが伝わってきます。

### 次世代による継承を

被爆者の高齢化に伴い、戦争体験のない人がかつての戦争の実相を継承していく時代が静かに、しかし確実に近づいています。今度は、残された世代の私たちが次の世代に戦争の実相を継承していき、恒久の世界平和を願っていききたいと思います。